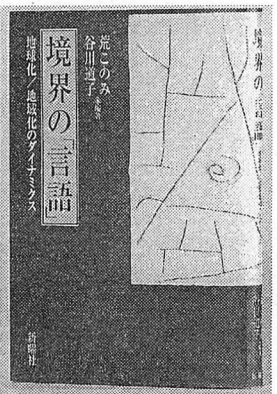


荒 二のめ
谷川 道子 編著



者による理論レベルの議論が収められている。グローバル化とローカル化の対立ではなく、その相互作用に働くクレオールのなシステムをこそ分析すべきだとするモーリス・鈴木テッサの指摘が本書全体の基調をなす。

第二部では、パーソナルな表現者のレベルから、この問題に新たな光が照射される。ここでは、多和田葉子の報告が新鮮である。

日本語を母語とする多和田は、ドイツ在住の作家で、日本語とドイツ語双方で作品を発表している。言語の境界地帯に身を置く多和田の「外国語を学ぶことは、豊かな国境地帯を創造する」ことだという発言が印象的だ。多和田は「国文学」としての日本文学、ドイツ文学ではなくただの「文学」としての日本文学、ドイツ語文学の可能性を切り開きつつあるのだ。

総括討論の第三部では西永良成（東京外大教授）の発言が貴重だ。グローバル化は新たなローカル化、差異化を増殖するに相違ない。あらためて「他者の言語、異文化の他性に敏感でなければならぬ」とは、等しき並み求められてくる覚悟なのだと思う。

「地球化」見据えた議論

英語公用語化論争というのが各種メディアをにぎわわせている。急速なグローバル化の進むなか、現今の日本の英語教育では埒（らち）が明かない。ならば、いっそ英語を公用語にでもというナイーブな立論に、左右のイデオロケが異を唱えている。

「国家」による朝鮮半島でのかつての言語政策の暴力をこれに重ねたり、「国語」としての日本語の衰退を憂えたりとその理由はさまざまである。とにかく、この論争の不毛は、グローバル化とローカル化の内的関係に対するまなざしの欠如にある。

東京外国語大学独立百周年記念事業として企画されたシンポジウム「言語」の二十一世紀を問う」の記録である本書は、言語をめぐるグローバル化とローカル化のまさに内的関係を問題にしている。

評・遠藤 健一（東北学院大文学部教授）

第一部には、社会学者や言語学

（新曜社・二、六〇〇円）